

菜集を読む

松岡 隆子

白菜の巻きそこそこに吾が余生

矢作 裕子

この句の（白菜の巻きそこそこに）に出合つて改めて歳時記の「白菜」の解説を読み、恥ずかしながら白菜が結球性、半結球性、不結球性に大別されることを知った。市場に出回っているのは殆どが結球性の白菜である。白菜は種まきの時期が早すぎても遅すぎても結球せず、また害虫被害や肥料の過不足などによつても結球しない場合があるという。

矢作さんは七年前にご夫君が急逝されてから一人で畑仕事を熟してこられた。少しでも品質の良い白菜を作ろうと懸命だったことだろう。最近はずいぶん自立されて（吾が余生）と言える状況になられたようだ。余生というにはまだ早い感じだが、これからは自分のための時間を大切になさつてほしい。

一病の友の饒舌小鳥来る

小泉 恵子

「小鳥来る」は秋に渡ってくる小鳥たちや、山から里に下りてくる小鳥たちのことを言う。小鳥が庭先などに来て囀っているのを聞くと、秋になったことを実感するのである。（一病の友）もようやく快方に向かつてきた。極暑を耐え抜いた闘病の日々を思いながら、元氣になったらあれもしてこれましてと話が弾む。本復の日も間近のようだ。

救急車止まりし家の秋ともし

田辺 文枝

救急車のけたたましいサイレンが近くで止まった。慌てて出してみると二軒先の向かいの家の前に止まっている。などという状況であろうか。明々と点されたその家の灯りと救急車の点滅する灯りが、秋の夜更けの森閑とした路地に不穏な空気を齎す。大事でなければよいがと心配そうに見守る田辺さんの姿が想像される。

この駅に馴染みて老いて冬に入る

森崎恵美子

森崎さんは東京の練馬区に在住されている。馴染みの駅は西武池袋線の大泉学園駅のようだ。若い時は駅の階段を軽々と上り下りしたものだ、この頃はすっかりエスカレーターやエレベーターに頼るようになった。同時作に（都心日々）に遠くなりたる十二月）がある。年老いてくると寒い冬は特に不精になる。（馴染みて老いて）が感慨深い。

秋深き日なれど蝶のふはふはと

晴 涼風

ふとあの時の蝶を思い出した。その日は十一月というのに

あたたかな日和だった。木々の黄葉は色を極めながらも時おり風に散っていた。やわらかな木漏れ日を舞う蝶が眩しかった。掲句の蝶もあの時の蝶と同じように蘭の秋を惜しむように舞っていたのだらう。(ふはふはと)というオノマトベがなんとも快い。ふわりふわりと散っていく黄葉に紛れてしまいそうな蝶が見える。詩人の晴さんらしい佳句である。

迷ひては五年日記といふを買ひ

小川テル子

「わかる、わかる」と思わず頷く。今までは迷いもなく買っていた五年日記、いや十年日記だったのかも知れない。ある年になると十年日記は続けられるだろうかと不安になる。小川さんはまだそんな年齢ではないと思うが、結局五年日記を買われたようだ。(買ふ)と言いつつ切つていないところに、決断に聊かの躊躇いがあったことが感じられる。

柿赤し鴉来る木も来ない木も

鈴木美代子

昨年は柿の生り年だったのかどうか定かではないが、鈴木さんの周辺では何処の家の柿の木もよく実っていたようだ。どの家の柿も同じように赤々と熟れている。ところがある家の柿の木には鴉がうるさいほど集まってくるのに、他の家の柿には全く寄り付かない。何かわけがあるのだろうか？ その不思議に気付いたことが俳句になった。

干蒲団二日続けて姉の夢

山下なつ子

蒲団は一年中使うものだが季語としては冬になる。寒さを

防ぐという意味合いが強いからであり、中でも日に干した蒲団はとりわけあたたかく眠りにつきやすい。太陽の匂いのするほかほかの蒲団にくるまれているとそれだけで幸せな気分になる。山下さんは二日続けて姉上の夢を見られたという。二日でも語り尽くせなかったのではなからうか。干蒲団もたらしてくれた幸せな夢であつたに違いない。

その他の印象句

散るほどに山茶花の道華やげり
銀の鈴つけて猫くる小六月
まだ残る母のぬくもりセーターに
晩学のノート大事や冬木の芽
冬晴を歩くや手足老いまじく
掌に彩を重ねて柿落葉
掃き残す野花むらさき庭の秋
嫌ひでも好きでもなくてセロリ噛む
弟も還暦迎へ小春かな
まつ白なセーターを着て少女めく
櫛の宿朝の冷えある白障子
勲章に縁なき吾も文化の日
生くること楽しくなりぬ冬の虹

梅澤 惇子
西島 美晴
朱 桂子
中原 栄
菅 雅子
桑原 和子
菅原 珠子
三宅まどか
宮当 信行
山崎 和音
加々美敦子
浅尾 泰昭
堀 すみ江